

# 米国の青少年向けメンタリング運動の成果に関する考察

## A Study on the Effect of the Youth Mentoring Movement in the U.S.

渡 辺 かよ子

Kayoko WATANABE

### 1. はじめに

本稿は、米国の青少年向けメンタリング運動がいかなる成果をもたらしているのか、MENTOR (The National Mentoring Partnership) が2023年に発表した *Who Mentored You: A Study examining the role mentors have played in the lives of Americans over the last half century* (誰がメンタリングを行なったのか：半世紀以上にわたってメンターがアメリカ人の生活において果たした役割を検証する研究)<sup>1</sup> の内容分析からその動向を概括し、今後の日本における青少年施策におけるメンタリング運動の重要性と可能性について論じたい。

20世紀初頭に開始された BBBS (Big Brothers Big Sisters) を中心に百年以上の伝統を持つ米国の青少年向けメンタリング運動は、1980年代末から1990年代初めの急拡大を経て今日に至り、「先進」各国の青少年向けメンタリング運動を主導している。米国の青少年向けメンタリング運動の中核としてメンタリングに関する各種研究と各地のメンタリング・プログラムの実践を繋いでいるのが、1990年に設立された MENTOR (The National Mentoring Partnership) である。MENTOR はマーケティングの技法とメディアキャンペーンに長けた二人の実業家兼慈善事業家によって創始された。本稿が検討するのは、2023年にMENTORが全米の各世代に成長期（幼少期／青年期）に受けたメンタリングの経験を問うた *Who Mentored You: A Study examining the role mentors have played in the lives of Americans over the last half century* に記されたメンタリング運動の成果である。

メンタリングは以下のように定義される。「メンタリング (mentoring) とは、成熟した年長者であるメンター (mentor) と、若年のメンティ (mentee、ないしはプロテジェ protégé) とが、基本的に一対一で、継続的定期的に交流し、適切な役割モデルの提示と信頼関係の構築を通じて、メンティの発達支援を目指す関係性を指す。メンタリングは日常的なインフォーマルなメンタリングと、人為的プログラムを介してなされるフォーマルなメンタリングに大別され、メンタリング・プログラムは後者に属するものである。」<sup>2</sup> メンタリングはメンティの自尊感情、対人関係、学業成績、非行防止等に有効に機能しうることが知られるが、各国の社会状況や教育文化を反映

して、自然発生的なインフォーマルなメンタリングを補完するメンタリング・プログラムの普及拡大を目指す青少年向けメンタリング運動は今なお進化の過程にある。本稿は実力主義・能力主義を標榜し、個人の才能と努力によるアメリカン・ドリームの実現を確信してきた米国でのメンタリング運動の成果を中長期的な進化の諸相として検討したい。

## 2. 2010年代までの米国メンタリング運動の展開と成果の概要

米国の青少年向けメンタリング運動の歴史的起源は、19世紀末に興隆したフレンドリー・ビジターと、20世紀初頭に非行少年少女の更生保護活動として開始されたBBBS運動にある<sup>3</sup>。80年以上前に開始されたBBBS運動が1980年代後半に著しく拡大したのは、当時の悪化する青少年の生育環境への危機感、ならびに1970年代の生涯発達論やキャリア発達心理学において注目されるようになった発達支援のエージェントとしてのメンターへの着目がある。多くの成功者にはその才能を開花させ成長に導いたメンターが存在するという従来にはなかった新たな認識による「セルフメイドマン神話」の崩壊と共に、メンタリング・プログラムは、メンタリングの機会の欠落のために実力を発揮できない女性やマイノリティのためのキャリア発達支援プログラムとして実施されるようになり、1980年代にはより広範な青少年問題に対応するために、地域・学校・企業が連携したメンタリング運動が本格的に展開されるようになった<sup>4</sup>。

今日に至る米国の青少年向けメンタリング運動の展開は以下のように概括することができる。青少年向けメンタリング運動の萌芽期（1983～1987年）には、伝統的なBBBSに加えて、各地で多彩な青少年向けメンタリング・プログラムやメンタリングに関する催しが開かれ、P/PV（Public and Private Venture）によるメンタリング・プログラムの効果研究も始まった。第一拡大期（1988～1996年）には、メンタリング・プログラムは1988年以後の2年間に倍増を続け、著名企業や企業連合が従業員をメンターとして地域コミュニティに送り出している。1995年には実験群と統制群を用いた画期的な効果研究によってメンタリングの効果が実証された。第二拡大期（1997～2002年）には全米メンタリング・サミットの開催（1997年）や全米メンタリング月間キャンペーン（2002年～）を契機にメンタリング運動はさらに拡大し<sup>5</sup>、2005年にはメンタリング・プログラムの参加者は1990年代の6倍の約300万人となった<sup>6</sup>。メンタリング運動は超党派の広範な支持を受け、メンタリングの効果への確信とメンタリング・プログラムの推進に向けた議会声明が出され、学校型メンタリング・プログラムに連邦補助金等の公的資金が投入された<sup>7</sup>。

しかしながら、2010年前後にはそれまでに発表された大規模な学校型メンタリング・プログラムの効果が極めて微小であることが判明し、リーマンショック等の経済的要因も重なってメンタリング運動への過剰ともいえる熱い期待は冷却を余儀なくされた。以後、メンタリングの成果の実証と研究の精緻化への要請と共に、メンタリング・プログラムによる功罪や青少年にとってのプログラム参加による得失の検討等、青少年向けメンタリング運動とメンタリング研究は新たな段階を迎えることになった<sup>8</sup>。

そうした青少年向けメンタリング運動の現状と課題に関する中間報告にあたるのが、

MENTORが2014～2018年に相次いで発表した三つの報告書である<sup>9</sup>。それらは青少年向けメンタリング運動を構成する三者、すなわちメンティとしての青少年に関する2014年の*The Mentoring Effect: Young People's Perspectives on the Outcomes and Availability of Mentoring* (メンタリングの効果：メンタリングの結果と利用可能性に関する青少年の展望)<sup>10</sup>、メンターとして活動する大人に関する2018年の*The Power of Relationships: How and Why American Adults Step Up to Mentor the Nation's Youth* (関係性の力：アメリカの大人はいかにして、なぜこの国の青少年のメンターになるのか)<sup>11</sup>、そして両者を結びつけるメンタリング・プログラムに関する2016年の*Examining Youth Mentoring Services Across America: Finding from the 2016 National Mentoring Program Survey* (アメリカの青少年向けメンタリング・サービスの検討：2016年の全米メンタリング・プログラムの調査からの発見)<sup>12</sup>である。

これらの三つの報告書のうち、本稿で検討する*Who Mentored You*の前提になっているのが、上述の青少年に直接メンターの有無を尋ねる全米初の調査となった2014年の*The Mentoring Effect*である。同報告書は前年夏に18～21歳の青少年1109人に8～18歳時のメンターの有無、メンターの必要性について電話とメールによる調査を実施した。青少年が抱えるリスクとは、不登校・怠学、停学・退学が、落第、触法、保護者の服役、ホームレス、若年出産等であり、米国の全4600万人の青少年のうち、リスク要因を持つ青少年は2400万人、うち1500万人にはメンターが存在し、プログラムを介したメンターがいた者が450万人、自然発生的にメンターがいる者が1050万人と推計された。リスク要因を持たない青少年2200万人のうち1500万人にはメンターが存在し、そのうちプログラムを介したメンターがいるものが240万人、自然発生的にメンターがいる者は1260万人であるとされた。メンターがいない青少年はリスク要因を持つ青少年900万人とリスク要因のない青少年700万人を合わせた1600万人で、これがメンタリング・ギャップと同定された<sup>13</sup>。

メンターのいるリスク要因を持つ青少年は、メンターのいない者よりも高い割合で大学進学を希望し、実際の在学継続率も高い。メンターのいる青少年はメンターのいない青少年に比べ、大学進学に向け計画的に生活する割合が高く、スポーツ等放課後活動やクラブや生徒会等でより指導性を発揮し、ボランティア活動への参加割合も高い。メンターが「助けになった」と回答した青少年は、プログラムを介したメンターでは95%、自然発生的にメンターと出会った場合は99%となり、いずれも交流継続期間が長いほどメンターとの関係性は高く評価されている。また、青少年全体の55%が自らメンターになることに「大変」ないしは「かなり」関心を持ち、22%が「少し」、22%は「関心なし」とする一方、メンターがいる青少年の86%、メンターのいるリスク要因を持つ青少年の85%がメンターになることに関心をもっている。青少年がメンターを必要としている割合は、全青少年で29%、リスク要因のない青少年では22%、一つのリスク要因を持つ青少年では29%、2つ以上のリスク要因を持つ青少年では43%となり、リスク要因を多く抱える青少年ほど高い割合で切実にメンターを必要としていることが判明している<sup>14</sup>。

### 3. 青少年向けメンタリング運動がもたらした成果の分析：Who Mentored You の概要

*Who Mentored You* は上述の *The Mentoring Effect* を受け、米国の青少年向けメンタリング運動がどのような成果をもたらしているのか、世代別に成長期（6～21歳）にメンターがいたのかどうか、メンターとの関係性について、定量的分析と定性的分析を組み合わせた調査を実施している。同調査は2022年に実施され、2639人の回答者の内訳は以下のとおりである。若年Z世代（2001～2004年生まれ、現18～21歳）612人、年長Z世代（1998～2000年生まれ、現22～24歳）609人、ミレニアル世代（1982～1997年生まれ、現25～40歳）522人、X世代（1966～1981年生まれ、現41～56歳）472人、ベビーブーマー世代（1965年以前の生まれ、現57歳以上）424人、である<sup>15</sup>。以下、世代間のメンタリング経験の違いと変化から米国のメンタリング運動が半世紀の間にどのように進展しているのか、青少年向けメンタリング・プログラムの成果について検討したい。

#### (1) 過去30年間のメンタリングの機会の増大

本報告書で第一に明らかになったことは、40歳以下の世代は全世代と比較して成長期にメンターがいた割合が高いことである。全世代では成長期にメンターがいた者が56%（プログラムを介したメンターがいる者は17%、自然発生的なメンターがいる者が47%）であるが、40歳以下では66%（プログラムを介したメンターがいる者は25%、自然発生的なメンターがいる者が53%）となっている。若い世代ほどプログラムを介したメンターがいた割合が高くなっているのは、メンタリング運動によるメンタリング・プログラムの普及拡大の成果と考えられ、Z世代（18～24歳）では27%、ミレニアル世代（25～40歳）では25%、X世代（41～56歳）では12%、ベビーブーマー世代（57～80歳）では9%となっている。Z世代（18～24歳）がプログラムを介してメンターと出会った確率はベビーブーマー世代の3倍となっている。また、プログラムを介したメンタリングの自然発生的なメンタリングに対する割合は、Z世代（18～24歳）では約半分（27%対49%）であるのに対し、ベビーブーマー世代では約2割（9%対41%）となってメンタリング・プログラムが時代を経て普及している。親族のネットワークを含むコミュニティでの自然発生的なメンタリングが比較的安定していることを考慮すると、40歳以下のプログラムを介してメンターと出会っている割合が増大していることは、ここ30年のメンタリング運動の拡大の成果と見なすことができる。このことは、成長期にメンターがいなかった者の割合が、全世代では41%、X世代（41～56歳）では47%、ベビーブーマー世代（57～80歳）では51%であるが、40歳以下では31%と少ないことも合致している<sup>16</sup>。

人種別の成長期のメンターの有無に関しては、白人よりも黒人等のマイノリティの方が高い割合でメンターが存在している。成長期にメンターがいた者の割合は、白人で52%、黒人等のマイノリティで62%となっている。出会いの様式については、プログラムを介してメンターと出会った白人が13%、黒人等のマイノリティでは24%となる一方、自然発生的にメンターと出会った白人は47%、黒人等のマイノリティが49%となっている。世代別のメンターの有無全体については、年長Z世代（22～24歳）以外のすべての世代で白人よりも黒人等のマイノリティの方が

成長期にメンターがいた割合が高く、プログラムを介してメンターと出会った者の割合は全世代で白人よりも黒人等のマイノリティの方が高い（若年 Z 世代（18～21 歳）：21%と 33%、年長 Z 世代（22～24 歳）：28%と 30%、ミレニアル世代（25～40 歳）：23%と 30%、X 世代（41～56 歳）：10%と 14%、ベビーブーマー世代（57～80 歳）：8%と 12%、である<sup>17</sup>。

成長期の社会経済状況とメンターの有無に関しては、概ね裕福なほどより高い割合でメンターと出会っている。メンターがいる割合では、貧困／低収入層が 53%、労働者階級が 53%、ミドルクラスが 58%、アッパーミドル／富裕層が 66%となり、プログラムを介してメンターと出会っている割合では、貧困／低収入層が 17%、労働者階級が 15%、ミドルクラスが 18%、アッパーミドル／富裕層が 22%となっている<sup>18</sup>。

また逆境要因（ホームレス、薬物乱用、親の収監、食事を安定確保できないこと、触法行為、養護施設での保護等）の数とメンターの有無の関係については、逆境要因が多い者ほどプログラムを介してメンターと出会う割合が高い。Z 世代（18～24 歳）でプログラムを介したメンターのみがいる割合は、逆境要因がない者は 7%、逆境要因が一つある者は 6%、逆境要因が二つある者は 15%、逆境要因が三つある者は 15%、逆境要因が四つある者は 21%となっている。メンターがいない者は、逆境要因がない者で 46%、逆境要因が一つある者で 37%、逆境要因が二つある者で 37%、逆境要因が三つある者で 45%、逆境要因が四つある者で 29%となっていることから、特に複数の深刻な逆境要因を背負い支援を必要としている者に重点的にメンタリング・プログラムがメンターを提供していることが見て取れる。また四つ以上の逆境要因を持つ者でプログラムを介したメンターと出会った者の割合は、Z 世代（18～24 歳）が 36%、ミレニアル世代（25～40 歳）が 32%、X 世代（41～56 歳）が 21%、ベビーブーマー世代（57～80 歳）が 15%となり、メンタリング運動によってメンタリング・プログラムが普及した時代に成育した若い世代ほどより高い割合でメンタリング・プログラムを介してメンターと出会っている<sup>19</sup>。

Z 世代（18～24 歳）については、全米の 9 つの地域別分析ではプログラムを介したメンタリングと自然発生的メンタリングの割合に殆ど違いはなかったものの、ニューイングランド地域が自然発生的にメンターと出会う割合が最も高く、プログラムを通じてメンターと出会う割合は最も低い。一方、中西部地域の西部と太平洋地域がプログラムを介してメンターと出会う割合が最も高い。また非英語話者の方が英語話者よりもメンターがいる割合が高く（メンターがいなかった非英語話者は 25%、同英語話者は 38%）、都市部で育った者の方が田舎で育った者よりもプログラムを通じてメンターと出会う割合が高い（32%と 21%）<sup>20</sup>。

一方、（メンターではない）大切な人（meaningful person）の有無についても世代間の違いが顕著になっている。大切な人とは「あなたと長い時間を共に過ごし、あなたに多くのよいことをしてくれる家族以外の人」と定義される。全世代のメンターならびに大切な人がいる割合は、「メンターがいる」が 56%（うち「メンターと大切な人の両方がいる」51%、「メンターはいるが大切な人はいない」5%）、「メンターはいないが大切な人はいる」が 31%、メンターも大切な人もいないが 14%となっている。これを世代別に見ると、若年 Z 世代（18～21 歳）では「メンターがいる」60%、「（メンターはいないが）大切な人がいる」33%、「メンターも大切な人もいない」

7%となっている。年長Z世代(22~24歳)では同様に64%・31%・5%、ミレニアル世代では69%・22%・9%、X世代(41~56歳)では49%・33%・17%、ベビーブーマー世代(57~80歳)では45%・38%・17%となっている。総じて、メンターや大切な人がいる割合は若い世代ほど高く、メンターも大切な人もいない割合は40歳以上で年齢が上がるにつれて高くなっている<sup>21</sup>。

成長期にメンターがいなかった原因としては、「メンターを見つける方法を知らなかった」が各世代で最も多く(37~52%)、「メンタリングやメンターがいることの価値を理解していなかった」(36~49%)、「参加可能なメンタリング・プログラムがなかった」(25~45%)が次いでいる。メンタリング・プログラムへの参加の障壁は、いずれもベビーブーマー世代(57~80歳)の回答で最も高い<sup>22</sup>。

プログラムを介してメンターと出会う割合は16~18歳が最も高く、自然発生的にメンターと出会う割合は19~21歳が最も高い。メンターは一人のみならず複数の場合もある。プログラムを介したメンタリングの多くは学校や放課後プログラムによるものである。自然発生的なメンタリングについては、6~11歳の3分の2、12~21歳の5分の3でメンターが存在し、教師や拡大家族、家族の友人が青少年のメンターとなっている<sup>23</sup>。

総じて、今日の若い世代は年長世代よりもメンタリングの機会が増大しており、過去30年間の青少年向けメンタリング運動の成果が現出している。メンタリング・プログラムが多重の逆境要因を抱えメンターを切実に必要とする青少年を主な対象として普及し、それによってメンタリング・プログラムへの参加障壁が徐々に取り除かれている。青少年向けメンタリング運動の展開によってメンタリングの機会が拡大し、より若い世代の青少年の生活にメンタリングという意義ある関係性がもたらされている割合が増大している<sup>24</sup>。

## (2) メンタリング・ギャップの拡大

必要とされるメンタリングが提供されていないというメンタリング・ギャップについては、コロナ禍の影響で白人のZ世代(18~24歳)とミレニアル世代(25~40歳)で拡大している傾向がある。白人のミレニアル世代(25~40歳)と年長Z世代(22~24歳)と若年Z世代(18~21歳)を比較すると、メンターがいるという割合は66%、63%、58%と漸減し、プログラムを介してメンターと出会った者の割合も23%、28%、21%となって若年Z世代(18~21歳)で急減している。若年Z世代はコロナ禍当時15~17歳であり、コロナ禍で百万人以上が死亡した米国で多くのメンターも亡くなっている。メンターとは以後減多に助言をもらっていない者が年長Z世代(22~24歳)で7%であるのに、若年Z世代(18~21歳)では14%と高いのはコロナ禍の影響があるのかもしれない<sup>25</sup>。

メンターを必要とするも出会えなかった者の割合については、そうした時期があったとする者は若年Z世代(18~21歳)で67%、年長Z世代(22~24歳)で64%、ミレニアル世代(25~40歳)で62%となっている。これらの世代で最もメンターを必要とした年齢は12~15歳、次いで16~18歳、19~21歳となっている<sup>26</sup>。

また注目すべきこととして、富める者がますます富む米国では家計を賄うために人々は複数の

仕事をもって多忙を極め、ボランティアとして地域の子どもと関わる時間が少なくなってきたことがある。昨今の米国内での人種的階層的分断により異なる人種の青少年にメンターとして支援をしようという活動から撤退する者も多い。特に白人の若年 Z 世代（18～21 歳）で上述のようにプログラムを通じてメンターと出会う割合が急減していることから、メンタリングは全ての青少年向けではなく課題をかかえる特別な青少年に向けられたものであるという先入観や誤解が発生しているのかもしれない。コロナ禍による青少年向けメンタリング運動への悪影響（対面交流の阻止、メンターの死亡、プログラムの閉鎖等）を考えると、今後の米国の成人のメンタリングの経験率の低減は免れないであろうという<sup>27</sup>。

### (3) 複数のメンターの必要性

「メンターがおらず、プログラムを通じてあるいは自然発生的であっても、家族以外の大人のメンターと出会いたいと思ったことがあるか」という問いに対し、多くの人がそうした時期があったと答え、その割合は若年になるほど高くなっている。ベビーブーマー世代（57～80 歳）で 41%、X 世代（41～56 歳）で 55%、ミレニアル世代（25～40 歳）で 62%、年長 Z 世代（22～24 歳）で 64%、若年 Z 世代（18～21 歳）で 67%となっている。またメンターを必要とした年齢は、各世代で 12～18 歳が最多となっている<sup>28</sup>。

メンターとの出会いを願うも実現していない割合を人種別にみると、白人が最も低く（50%）、黒人等のマイノリティが 60%となっている。黒人等のマイノリティのそうした割合をより詳細に見ると、ラテン系が 60%、黒人が 64%、原住民系が 59%、アジア系が 66%となっている。社会経済階層別では最も貧しい階層が最もメンターとの出会いを願うも実現していない割合が高く、貧困／低所得層が 66%、労働者階級が 52%、中間層が 50%、アッパーミドル階層／富裕層が 53%となっている。性的マイノリティはメンターとの出会いを望むも実現していない割合が 72%となり、性的マジョリティ（同 52%）と比較して極めて高い<sup>29</sup>。

こうした叶えられなかったメンターとの交流を必要とする内容については、克服すべき問題が 54%（離婚や親の不在や死亡等の家族問題が 24%、精神健康（自殺、抑鬱、不安）11%、大変な時期（問題への対応、奮闘等）7%、アルコール・薬物 6%、虐待（身体的、性的）5%、友人問題（友人がいない・問題ある友人）5%、関係性の問題（別れ、若年結婚）3%、いじめ 2%、思春期・身体変化 2%、ジェンダー問題・カミングアウト 2%、妊娠・若年子育て 2%となっている。支援やガイダンスが必要とされたのは 29%（ガイダンスや方向性が必要とされ迷い込んでいる状態 10%、話し相手がほしい・親以外の誰か 8%、淋しさ（淋しく愛と注目の必要）5%、支援 2%、自信と独立 2%、学習 2%となっている。学校やキャリア・成功については 19%（学校関連の支援 8%、キャリア 6%、カレッジ 5%、経済的問題 2%）、その他 25%（十代特有の成長・移行・引越 15%、全てのこと・一般的にあったらよかったのに 8%）となっている<sup>30</sup>。

メンターを必要とするもメンターがいなかった時の問題や課題で特に注目すべきは、若年 Z 世代（18～21 歳）の精神健康の問題である。同世代の 25%の者が精神健康に関してメンターを必要とするもメンターがいなかったとしており、その割合は X 世代（41～56 歳）の 6%やベビーブー

マー世代（57～80歳）の7%の約4倍となっている<sup>31</sup>。

#### (4) 自らの人生の成功とメンター

メンタリングは人々に何をもたらしているのか長期的な視点からその成果を問うと、メンタリングは人々によって高く評価され、深い感謝の念と共に想起されている。アメリカ人は世代を超えて自身の人生における成功の多くを成長期に受けたメンターからの支援（メンタリング）に帰している。ここでの尺度は、メンターが全く影響を及ぼさなかった場合は0%、文字通り成功の全てがメンターの影響によると感じている場合は100%として以下が判明している。全体平均で人生の成功の56%がメンターによるものであると回答し、全体の3分の1のアメリカ人が自らの成功の少なくとも75%以上をメンターの影響によるとし、ほぼ4分の3のアメリカ人が50%以上をメンターの影響によるとしている。このことはプログラムを介したメンタリングにおいても自然発生的なメンタリングにおいても同様である<sup>32</sup>。幼少期に貧困であった者や現労働者階級、高校卒業以下の学歴の者、逆境要因を4つ以上持つ者等が、特にメンタリングを自身の人生における成功の要因としている<sup>33</sup>。

メンターが人生の成功に及ぼした影響は世代を超えて一貫しており、70～74%となっている。若年Z世代（18～21歳）は平均で72%（大いに35%、相当38%、幾分15%、殆どない13%）、年長Z世代（22～24歳）は平均で70%（大いに30%、相当41%、幾分23%、殆どない6%）、ミレニアル世代（25～40歳）は平均で74%（大いに40%、相当35%、幾分20%、殆どない6%）、X世代（41～56歳）は平均で73%（大いに38%、相当36%、幾分21%、殆どない5%）、ベビーブーマー世代（57～80歳）は73%（大いに38%、相当35%、幾分23%、殆どない4%）となっている<sup>34</sup>。

メンターがいることは所属感覚(sense of belonging)にも影響が及んでいる。成長期にメンターがいた人の所属感覚の平均が72%（所属感覚の大変弱い者は6%）であるのに対し、メンターがいなかった人の所属感覚の平均が59%（所属感覚の大変弱い者は17%）となっている。現在の所属感覚については、メンターがいた人の所属感覚の平均が81%（所属感覚の大変弱い者は3%）であるのに対し、メンターがいなかった人の所属感覚の平均が72%（所属感覚の大変弱い者は8%）となっている。成長期にメンターがいた人は、メンターがいなかった者に比べて、当時も現在も所属感覚が強い<sup>35</sup>。

メンターがいることと精神健康については、特に若い世代でメンターが精神健康を支援していることが顕著になっている。メンターが精神健康の試練について支援してくれたとする割合は、若年Z世代（18～21歳）は58%、年長Z世代（22～24歳）は61%、ミレニアル世代（25～40歳）は42%、X世代（41～56歳）は33%、ベビーブーマー世代（57～80歳）は17%となっている<sup>36</sup>。また成長期にメンターがいた者の現在の精神健康はメンターがいなかった者に比べてよいことが判明している。成長期にメンターがいた者の現在の精神健康の平均が72%（excellent/very goodは60%）であるのに対し、メンターがいなかった者の現在の精神健康の平均は59%（excellent/very goodは50%）となっており、メンターがいたことが現在の精神健康に影響を及

ぼしている<sup>37</sup>。

成長期にメンターがいたことは多くの望ましい行動や態度に影響を与えている。学校からの表彰や栄誉、カレッジ進学への準備や卒業、スポーツ等のクラブ活動への参加、地域コミュニティでの恒常的な参加、リーダーシップ等である<sup>38</sup>。

社会経済的階層移動とメンタリングについては、全体的にはメンターの有無による有意な差は見られず、メンタリングが社会経済的階層移動に影響を与えているとはいえない。しかしながら労働者階級や低所得者層出身者については、メンタリングと社会経済的地位の上昇との間で相関が見られた。18～40歳世代の労働者階級や低所得層出身者で成長期にメンターがいた者は全体で66%、成人期に社会経済的地位を上昇させた人でメンターがいた人は72%、社会経済的地位が上昇しなかった人でメンターがいた人は59%であった。同様に社会経済的地位を上昇させた人は、18～40歳の同世代全般と比べて、プログラムを介した場合でも(29%と25%)、自然発生的にメンターと出会った場合(59%と53%)でもメンターがいる割合が高かった<sup>39</sup>。

#### (5) 最も大切な最重要のメンターによる多様な支援

最も大切な最重要のメンターについては、今回の調査では自然発生的に出会ったメンターがプログラムを介して出会ったメンターの3倍となっているが、多くはプログラムを介したメンターと自然発生的に出会ったメンターの両方と出会っており、両方のメンターが重要な役割を果たしていると考えられる。プログラムを介したメンターは出会いの年齢幅が広く、12～21歳が重要とされるが、自然発生的なメンターは16～21歳が最も重要な時期となっている<sup>40</sup>。

プログラムを介したメンターと出会った場所については、学校ないしは放課後プログラムでの出会いが最も多くなっている。一方、自然発生的なメンタリングでは、教師や親類、家族の友人が多い<sup>41</sup>。全世代の最重要なメンターとの交流の始まりについては、自身からが21%、メンターからが48%、親や保護者からが20%、その他が8%となっている。またプログラムを介したメンタリングでメンターの選択ができたという割合は62%であった<sup>42</sup>。

現在交流が終了した最重要のメンターとの交流期間については、9か月以下が9%、9か月～2年が20%、2～5年が33%、5～10年が17%、10年以上が21%となり、2年以上が71%、5年以上が38%と長期の交流が継続している。2年以上の交流が継続している割合を世代別に見ると、若年Z世代(18～21歳)は34%、年長Z世代(22～24歳)は56%、ミレニアル世代(25～40歳)は58%、X世代(41～56歳)は71%、ベビーブーマー世代(57～80歳)では81%となり、メンターが存命であるかぎりには助言を受ける等の交流が継続している。また高所得層ほど最重要のメンターとの交流が継続し、また逆境要因を多数背負っている者もメンターとの交流が今日に至るまで長く継続している<sup>43</sup>。

最重要のメンターが自身をどのように支援してくれたのか、メンターの行動については、「全く当てはまる」(very true)と「幾分当てはまる」を合わせて95%以上であったのは、「自身をそのまま受け入れてくれた」、「よく話を聞いてくれた」、「信頼してくれた」、「忍耐強く接してくれた」、「自身が話していることを真面目に受け取ってくれた」、「計画した活動に従った」、「自身

が挑戦を受けた時支えてくれた」、「将来について考えることを助けてくれた」、「問題が発生した時、一緒にいてくれた」、「スキルや物事のやり方を教えてくれた」、「一緒に過ごした時間を楽しんでいた」、「笑い冗談を言った」、「私の意見や私がどう思うかを尋ねてくれた」である<sup>44</sup>。全般的に殆どの項目で、自然発生的なメンターの方がプログラムを介して出会ったメンターよりも高い割合を示していた<sup>45</sup>。

一方、青少年が最重要のメンターから受けた支援については、上記のメンターの行動とは異なり、自然発生的に出会ったメンターもプログラムを介して出会ったメンターも統計的に有意な差はなかった。青少年がメンターから受けた支援として「全く当てはまる」(very true)と「幾分当てはまる」を合わせると、「問題解決を助けてくれた」96%、「所属感の構築を助けてくれた」93%、「自身が何者であるのか理解するのを助けてくれた」92%、「教育課程外の活動や才能を支援してくれた」93%、「自身とは異なる考え方に触れさせてくれた」90%、「学業のスキルを学ぶのを助けてくれた」85%、「楽しい時間を一緒に過ごしてくれた」86%、「私の生活圏にいる親や保護者や他の大人との関係性について話した」83%、「新たなキャリアや仕事に関係するスキルの学習を助けてくれた」84%、「料理や金銭の取扱いといった生活上のスキルの学習を助けてくれた」83%、「友人との関係性について話した」81%、「その他のサービスや支援と繋がるのを助けてくれた」79%、「私自身の文化と繋がることを助けてくれた」72%、「一緒に地域コミュニティの催しや提供に出向いてくれた」77%、である<sup>46</sup>。

一方、大切なメンターによる様々な支援が青少年にとってどの程度重要であったについては、「極めて重要」「大変重要」「幾分重要」を合わせて97%に達したのは「自身が何者であるのか理解するのを助けてくれた」、「教育課程外の活動や才能を支援してくれた」、「学業のスキルを学ぶのを助けてくれた」、「楽しい時間を一緒に過ごしてくれた」、「私の生活圏にいる親や保護者や他の大人との関係性について話した」、「新たなキャリアや仕事に関係するスキルの学習を助けてくれた」、「友人との関係性について話した」である。同96%であったのは、「問題解決を助けてくれた」、「所属感の構築を助けてくれた」、「自身とは異なる考え方に触れさせてくれた」であり、95%となったのは「料理や金銭の取扱いといった生活上のスキルの学習を助けてくれた」、「その他のサービスや支援と繋がるのを助けてくれた」、「私自身の文化と繋がることを助けてくれた」であり、「一緒に地域コミュニティの催しや提供に出向いてくれた」は94%であった<sup>47</sup>。

これらをふまえ、同報告書は今後の青少年向けメンタリング運動の在り方について以下の四点を提起している。第一はメンタリング運動は今日の青少年を支援するために関係者全員が総動員で取り組む必要があるということ、第二は可能な限り多くのアメリカ人にメンタリングの心構えを育成しなければならないこと、第三はメンタリングの関係性においてますます所属とアイデンティティに関する支援が強調されるべきこと、第四は意義ある関係性を見出すのが最も困難と思われる青少年をさらに見出し支援しなければならないということ、であるという<sup>48</sup>。

#### 4. おわりに

以上、2023年に発表された各世代の成長期のメンタリング経験を問う *Who Mentored You* の

報告内容を概括してきた。ここで明らかになったのは、1980年代から拡大してきた米国の青少年向けメンタリング運動が確実に成果を上げ、青少年の生活によき影響をもたらしていることである。

メンタリング運動の成果の第一はメンタリングの機会の拡大であり、40歳以下の若い世代はメンタリング運動によって普及したメンタリング・プログラムを介してメンターと出会う割合が高くなり、全体としてメンターがいる割合も高くなっている。またメンタリング・プログラムの普及によって、黒人等のマイノリティや多重の逆境要因を背負う青少年にメンターがいる割合が高まり、逆境要因を背負うが故の不利益を克服するためのメンタリングの機会が整備されてきている。

メンタリング運動の成果の第二はメンタリングが精神健康等、多くの成果をもたらしていることであり、それが改めて実証されたことである。学業スキルや進学率、ボランティア活動への参加やリーダーシップの発揮等に加え、メンターの存在やメンターとの長期に渡る交流によってメンティの所属感が増進され、アイデンティが強化されている。こうしたメンタリングの成果をより十全にするために、多様な複数のメンターとの交流も視野に入れたプログラムの充実が必要になってきている。

メンタリング運動の成果の第三は青少年は各種の支援を提供してくれたメンターに大いに感謝し、自らの人生の成功の多くをメンターの支援に帰していることである。1970年代に既にセルフメイドマンの神話は挑戦を受けていたが、今回の調査で立身出世や社会経済的地位の上昇の有無にかかわらず、ごく一般的な人々の意識にあってもメンターへの感謝の念は深く、またそうした感謝は世代をこえて生涯にわたって継続していることが判明している。幼少期に貧困であった者や労働者階級、高校卒業以下の学歴の者、多数の逆境要因を持つ者が、特にメンタリングを自身の人生における成功の要因としていることはメンタリング運動の成果として強調されねばならない。

メンタリング・プログラムの普及発展を目指す青少年向けメンタリング運動はあくまでも自然発生的なメンタリングを補完するものであり、今回の調査でも、学校の教職員や親類等の自然発生的な出会いによるメンターの方が良質の支援を提供していることが判明している。青少年向けメンタリング運動が未成熟でメンタリング・プログラムも殆ど普及していない日本にあっては、自然発生的なメンタリングの機会を醸成しつつ、そうした機会を得にくい多重の課題を背負う青少年を対象とするメンタリング・プログラムをスティグマにならないような工夫と共に強化していくことが肝要と思われる。

---

<sup>1</sup> MENTOR, *Who Mentored You: A Study examining the role mentors have played in the lives of Americans over the last half century*, 2023. (<https://www.mentoring.org/wp-content/uploads/2023/01/Who-Mentored-You.pdf>)

- <sup>2</sup> 拙稿「メンタリング・プログラム」『コミュニティ心理学ハンドブック』東京大学出版会 2007年。  
拙著『メンタリング・プログラム：地域・企業・学校の連携による次世代育成』川島書店  
2009年。DuBois, D. & Karcher, M., eds., *Handbook of Youth Mentoring*, Second Edition,  
Sage, 2014. 等を参照。
- <sup>3</sup> 拙稿「米国におけるメンタリング運動の誕生と発展の素描：BBBS運動を中心に」『現代社会  
研究科研究報告』（愛知淑徳大学）第1号 2006年。
- <sup>4</sup> Freedman, M., *The Kindness of Strangers: Adult Mentors, Urban Youth, and the New  
Voluntarism*, Cambridge University Press, 1993. 拙稿「円環的生涯発達支援としてのメンタリ  
ング・プログラムに関する考察：米国の事例を中心に」『教育学研究』第69巻第2号、2002年。
- <sup>5</sup> 拙稿「米国におけるメンタリング運動の展開」『言語文化』（愛知淑徳大学言語コミュニケーション  
学会紀要）第11号 2003年。同「『全米メンタリング月間』キャンペーンに関する考察」『愛  
知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇』第38号 2013年を参照。
- <sup>6</sup> MENTOR (The National Mentoring Partnership), *Mentoring in America 2005: A Snapshot  
of the Current State of Mentoring*, 2006.
- <sup>7</sup> 拙稿 2003年、同 2013年を参照。
- <sup>8</sup> 拙稿「米国連邦政策におけるメンタリング・プログラムと学校教育制度」『愛知淑徳大学論集  
－文学部・文学研究科篇』第35号 2010年。Wheeler, M. et al., Review of Three Recent  
Randomized Trials of School-based Mentoring: Making Sense of Mixed Findings, *Social  
Policy Report*, 24-3, 2010. 等を参照。
- <sup>9</sup> 拙稿「米国の青少年向けメンタリング運動の動向：MENTORによる三つの報告書（2014～  
2018）の検討から」『愛知淑徳大学論集－文学部篇－』第44号 2019年。を参照。
- <sup>10</sup> Bruce, M. & Bridgeland, J., *The Mentoring Effect: Young People's Perspectives on the  
Outcomes and Availability of Mentoring*, Civic Enterprises with Hart Research Associates for  
MENTOR: The National Mentoring Partnership, MENTOR, 2014.
- <sup>11</sup> Garringer, M. & Benning, C., *The Power of Relationships: How and Why American Adults  
Step Up to Mentor the Nation's Youth*, MENTOR, 2018.
- <sup>12</sup> Garringer, M. et al, *Examining Youth Mentoring Services Across America: Finding from the  
2016 National Mentoring Program Survey*, MENTOR, 2017.
- <sup>13</sup> Bruce & Bridgeland, op.cit. 拙稿 2019年を参照。
- <sup>14</sup> Ibid.
- <sup>15</sup> MENTOR, *Who Mentored You*, p.5.
- <sup>16</sup> Ibid., pp. 10-11.
- <sup>17</sup> Ibid., pp. 12-13.
- <sup>18</sup> Ibid., pp.14-15
- <sup>19</sup> Ibid., pp.16-17.
- <sup>20</sup> Ibid. p. 17

- <sup>21</sup> Ibid., p.18.
- <sup>22</sup> Ibid., p. 19.
- <sup>23</sup> Ibid., p.20.
- <sup>24</sup> Ibid., p. 20.
- <sup>25</sup> Ibid., pp.21-24.
- <sup>26</sup> Ibid., p.26.
- <sup>27</sup> Ibid., pp. 27-28.
- <sup>28</sup> Ibid., p.31,
- <sup>29</sup> Ibid., p.32.
- <sup>30</sup> Ibid., p.34.
- <sup>31</sup> Ibid., pp. 35-36.
- <sup>32</sup> Ibid., p.37.
- <sup>33</sup> Ibid., pp. 38-39.
- <sup>34</sup> Ibid., p.40.
- <sup>35</sup> Ibid., pp. 41-42.
- <sup>36</sup> Ibid., p.42.
- <sup>37</sup> Ibid., p.43.
- <sup>38</sup> Ibid., p.44.
- <sup>39</sup> Ibid., p.46.
- <sup>40</sup> Ibid., p. 49.
- <sup>41</sup> Ibid., pp.50-51.
- <sup>42</sup> Ibid., p.51.
- <sup>43</sup> Ibid., p.52.
- <sup>44</sup> Ibid., p.53.
- <sup>45</sup> Ibid., pp.53-54.
- <sup>46</sup> Ibid., p.55.
- <sup>47</sup> Ibid., p.56.
- <sup>48</sup> Ibid., pp. 58-60.